

最愛の狐の糜爛に鴉は、あるいは
は鼯鼠の鴉の惰性に狐はどう向
き合うか

雷之電

目次

3	2	1
11	7	1

「相変わらずつ、……容赦ないな……!」

飯綱丸の姓の通り、龍の家は代々飯綱として、この管狐を使役している。慣習通り雌雄とも「飼つ」ていれば破綻は目に見えていたが、飯綱自身をいわば旦那としてしまうことでこの問題を解決していた。

そしてこのザマだ。双頭の張形を介して、仰向けの龍に上から乗る形で、典が執拗に腰を打ち付けている。日中こき使い夜は彼女の望むとき、いかなる状況でも、申し出があれば相手をする。慣習を破る代償と心得ていた。

……鳥同士のように、「健全に仲良く」とはいかない。食肉目の発情期はとにかくお互い大変だ。鴉と狐では、いくら交わろうとその行為のゴールはなく、ひたすら募る飢えを延々と受け止め続ける必要がある。

「つ、まだ、か」

「んへへ、四回いつてますよ?」

すでに動きはベタついている。そんな体の疲労を振り切つて、無尽蔵の愛と快楽に、なお浸る。腰の浮く時間は短く、沈むのは長く。より投げやりに。乱暴になつていく。

「疲れてんでしょ。明日もあるんだし、風呂にしよう」

動きが止まり龍に典の全身が委ねられた。

「……むっ」

典は糸の切れた人形のように動かない。それまでの疲労は終わりに全てのしかかってくる。食肉目らしいこんな体質では本当に辛かるうが、長い目で見れば一過性ではあるものの、少なくとも今は、典は他のどんな狐、鴉よりも龍のことを好いて——もしくは気に入つて——いて、龍も典を飼ううちにそうなつていた。

「さつ、入ろ。行くよ」

布みたいのにやへになつた典を抱え上げ風呂場に直行する。

事後汗でべつたべたになるので最後に風呂に入り、シートも替える。典を継いだとき、とにかく寝具の汚れの始末が大変だといふので、敷布団に二重でシートを敷くようにした。

……こんな爛れた生活を、知つてか知らずか受け入れてしまったせいで、飯綱丸家には大天狗らしい威厳というものが欠けているように龍には思える。こんな生活を代々続けていることは口にしていないが、勘の鋭い者が幾度となく噂にしていた。

他の大天狗は知っている。しかしみな身内への情に厚く、仕方ないよねと肩を叩いてはくれる。

不純交遊ダメゼツタイ!とか、今更馬鹿げたことを大天狗はほざいているが、こんな身なので自分がそんなこと厳しく言えるわけがない。部下の痴話は黙認していた。

家制度を崇め奉り、自分の意志で子をもうけようなどとは思っていないし、この腐った縦社会を維持するために若者を殉死させるのもやめにしたい。脅威には強い奴が立ち向かえばいい。それだけだ。

一枚岩削り出しの釜風呂。突つつかれていた閨侍女に焚かせておいた。人肌のぬるま湯にといいつけていたが彼女の体温は龍より低いのでなんと風呂らしくない湯が出来上がる。最近はもう少し熱くと訂正した。

桶の湯で流れていってしまいそうなほどの脱力で、また軽い。溝に流れ出ない程度に身体を湯で流し二人並んで湯船に浸かる。

「オキシトシン中毒じゃないか」

小言もお構いなし、典は龍の肩にもたれてうとうとしてしている。

オキシトシン中毒はお互い様かもしれない。日中は散々身勝手に振る舞いあらゆる場をかき乱してまわるのに、家じゃ好意が全て龍に向かうせいで、ついそんなことはどうでもよくなってしまう。

「だーめ、起きなさい」

ここで寝られると朝まで起きてこない。流石に魂の抜けたお人形をきれいにするだけの気力は龍にも残されていないので、無理矢理にでも起こし自分で洗わせる。

くらくら揺れながらも自分でわしわし髪を洗い始めた。遅ればせながら天狗の街にもマニユフアクチュアの恩恵は到来していて、ここ数十年で簡単に、それはもう簡単に、しかも選り好みしてシャンプーだの石鹸だの買って使えるようにはなったが、今だ多くの者が、洗髪には米の研ぎ汁を愛用している。多様な毒を克服してきた人間に近い姿とはいえ、鴉、狼（、狐？）混じりの天狗ユニオンの肌には強すぎるのだ。

「……」

こてん、と落ちた。姿勢が落ちた。もうだめだ、洗ってやろう。

湯から出て、胡座の上に乗せる。「玉の肌」と呼ぶに相応しい澆刺きを存分に湛えてはいるが、実はこの典、身勝手さゆえ他人の恨みを買いやすく、生傷が絶えないのだ。傷が痕として残るたび、その皮を真皮まで剥がし、謎の妖怪パワーできれに再生させているようだ。先の熾烈な弾幕ごっこでの傷があちこちに顔を出している。

保身のためにわざわざ歪んだ契約をして、こんなになるまで使い倒して、自分は結局何がしたいのだろうか。辛い発情期の世話をしていると毎日、龍はこの間に頭を抱える。妖怪とはいえ人生の貴重な時間をことごとく奪い、本人にとつてまったく無益な争いに加担させている。

もし、この管狐を管から開放してやったら、彼女は どうするだろうか。心の腹の中は読めん奴だ。開放して離れてしまったら、などと自分本位の思考ばかり巡らせてしまう。

しかし本当に、何代もうちで継いできたとは思えないほどの若さ、いやそれどころか幼さすら感じる。「早熟なガキ」に近い、過去を振り返つての奇異な印象は、ずっと前、一番古い記憶から変わっていない。

大食のくせに細い。どこを蹴つても簡単に折れてしまいそうなほどで、実際力も強くはない。他の妖怪に見られるような見た目に釣り合わない怪力もない。言つてはなんだが、所詮狐だ。

所詮狐。伝令など部下に任せればよい。何故飼っている？

龍は、継ぐものだと教えられるまま継いだ。それからは、外向きとして主従あるように振る舞っているが、実際は、歪ではあるがすでに家族愛にも似たものを持つている。

いや生まれたときから典は変わらず家において、その時点で抱えていた家族意識を、あと付けの主従が上塗りしようとした、というのが真か。

変わった狐のねえちゃんから、いつの間にか、手に余る奔放な子供と見始めたのも、それがきっかけかもしれない。実に大きな違和を感じる。年を取らない（感じさせない）不変の姿を持つ点で、妖精にも近いものがある。

……幼く見える理由付けとしてはこじつけのように思えるが、自身を納得させることはできた。

飯綱丸家は代々変わらざるこんな世話を焼かされてきたようで、「夕方以降は私の部屋に近づかないように」という父の言葉の意味を知つたあの初夜、非常に複雑な感情に吞まれそうになったのを龍は憶えている。責務とはいえ父、その父、そのまた……と抱かれてきたその身体が、いよいよ自分の目の前で踊るのだ。

そしてそんなおぞましい事実もまた、育まれる無償の家族愛の前には無力だった。

自分のことは程々に風呂場から上がり、適当に寝間着を着せ布団の中に引き込んだ。シートも二重で取り替えてある。

一枚だけ着て寝るには肌寒い微妙なこの季節、この湯たんぼ……典にとつては龍が湯たんぼ……が役に立つ。心まで温める湯たんぼなど他にない。

耳の内側のふわふわに振れると典がその耳をべたつと後ろに倒してしまう。白狼天狗も同じくかなり嫌がつて、やりすぎ

るとパワハラだとかワンワン吠えてくる。

まあそれでいいのだ。直属でないにしろ明確な上下関係が存在するからこそ、互いの仲は縮まらず、無茶はただの嫌がらせとなる。それと、絶対服従は公務に限る。

「つたあ……」

発情のお供が続くと、その乱暴な寵愛を受けた粘膜の痛みが、後になって響いてくる。典のほうも、もはや麻痺しているとはいえ確実に障っているだろう。もう少し平和な手段はないものか……

様々憂ううち、自分も落ちる。

「……ひとつ、いいか」

次の日。典を遣いに出しているうちに、離れの書齋に射命丸文を呼びつけた。

「呼び出しを喰らうようなあれこれには事欠かないだろうが、大丈夫、今日はくだらん定型文を投げに呼んだのではない。丸……についてだ。私と君の姓につく、丸だ。いくら調べても深い意味が出てこないんだよ、これが……どう思う？」

突拍子もない問いきよんとする文。彼女の廉恥を欠いた行動が耳に入らない月はないが、叱ったところで変わるような浅い行いでもないことはわかっている。

「つと、そうですね……丸の部分については何も、親族から伝え聞いたことではないのですが……音の調子を整えるとか、漁船によくつけるとか、……やはり丸そのものに意味はないように思われます」

「……そうか。いや実はそれだけなんだ。礼として半年の新聞購読を約束する。あと、昼はまだかい？一緒しよう」

そのときだった。

「いつ、飯綱丸様」

勢いよく引き戸を開け乱入してきたのは早くも遣いから戻った典だった。ひと目もはばからず全速力、最短距離で抱きついてくる。

「くら、射命丸君、すまない、正門で待っていてくれ」

言って聞かないことも承知だ。どうせ陰で全て記録するに違いない。

形式上彼女を追い出したところで典を抱き返し頭を両腕で撫でまわす。

「日中はくつついちゃだめって言うてるだろう、余計に辛くなるぞ」

白狐のくせに湯気が立ちそうなほど真つ赤に熱くなっている。これじゃ仕事もままならない。

「今日は休め。夕方までの辛抱だ」

餓鬼の苦しみであることは理解しているつもりではある。

書齋から母屋の典の部屋へ向かうときもずつと押し黙り、腕にびったりくつついていた。

たまにこういったことはある。そのたびこうして昼間から部屋に押し込んでおく。……帰る頃には凄いいことになっている。

「待たせてすまない。さあ行こう」

正門についたときにはきつちり文はそこに立っていた。並々ならぬ緊張の様子から始終を目の当たりにしたことは明らかだ。

大天狗らしからず定食屋へ入る。

「日替わり定食Aにしなさい。いつもろくなもの食べてないでしょう」

「はあ、慧眼かストーカーか、わかりかねます」

まあ確かに他者よりも好感は持っていた。誰が相手でもきつい冗談を欠かさない腐った根性が心地よい。

「君は饜わんよ。相手いるんだってな」

返事がない。

「身構えなくたっていい。前例を知らなかったんだから、知られたくないのはよくわかる。しかし見たろ、君と同類さ」

「……えっと」

言葉が見つかっていない。

「本当は食事いっぱいに話すようなことでもないんだがね。あんな形で醜態を晒すことになろうとは思っていなかったが、見えない綱を渡る部下がいればお節介も焼きたくなるものさ。胸張って道歩きなさい」

いいこと言っているように見えるが最近では彼氏彼女について言及することもセクハラと見做されるらしい。しかしこの場合、こうするより他になかった。

「高潔ぶる大天狗こそ、醜態を晒すくらいが丁度いい。無駄に固い社会の雰囲気はぶち壊してなんぼだろうに」

「……ちよつと、冗談は思いつきませんね。突然のことです」
「それと、できあがっているなどは周りも勘づいているぞ。大胆なこつて」

何人かの鴉天狗に混じり一つの机を囲んで典も酒をあおっている。

「あれ、狐って分解酵素持ってたっけ」

「持って、も、持ってない、けど……私、妖怪だし、あれ……」

変な酔い方をしている。普段もりもり食べて鴉をドン引きさせる唐揚げにも手を付けていない。

「どしたてんちゃん、一回裏行こう」

店の裏の茂みが店公認の嘔吐スポットだ。

「ん、待って、……立てん」

事後に似た強烈な虚脱感に襲われていた。ただごとじゃない。血の気もない。

「まっずいな、俺らで送ってくわ。先やってて」

二人護衛としてつき帰ることになった。一人におぶられて向かう。

「てんちゃん、頼むから吐くときは言ってくれよ」

冗談を笑う余裕もない。

通りからいくつも逸れた脇道に出る。

「あつ待った。催した……ちよつとここで待ってて」

二人の足音が遠ざかる。暗い路地に一人残された。

常時騒がしい大通りからの喧騒の他にない。どろつとした闇がすっかり典を呑み込んでいる。提灯くらい置いて

いつてらえよよかった。

そうして近づいてきた足音は、先程の天狗とは明らかに違っていた。

「!!」

姿も見ぬ間にひよいと抱えあげられる。虚脱感が勝りろくに動けもしない。

典は経験から、叫べば最悪シメられることは察していた。

それぞれ同じくらいの体格の鴉天狗が二人。憑けばなんとかやれるか？

「った、!!」

「変な真似したら殺すからな」

並ぶ男の脇差が典の右腰を掠める。

連れられたのは一軒の民家の裏口だった。廊下にどてつと投げ下ろされる。

「めんどくせえ、こっでやるぞ」

典の薄い服を片手で破り捨て四つの手が全身をまさぐり始めた。

「あんたら、大天狗様に殺されたいの」

「その前にお前を殺すだけだ、まだ立場わかってねえみてえだな」

塩っぱい指で陰核を思いきりつねる。焼けた鉄板に触れたように暴れるがその手を離すことはない。

「んだ、その目はよお」

右に捻る。

「うあつ、だめ、だめだめやめてえ」

「つたく狐つてなア何考えてつかわかんねえな」

もう一人が髪を鷲掴みし頭を床に何度も叩きつける。後頭に血が滲み、啼きもしくなつた頃、それらは止んだ。

「つは、……………ん、……………」

緊張で冷えた仰向けの腹を男が片足で踏みつけると生氣を取り戻し、混濁ながらに細い腕でその足を掴んだ。

「これからお前のちつせえ腹をめちゃくちゃに犯してやろうと思うんだが、いいよな」

いいよな。再度の念押しにも答えられなかった。涙ながらも抵抗とも言えぬ力で訴えていた。

「なんだよもうびちよびちよびちやねえか、期待してんだろ」

岩のような手が、主との聖域を容赦なく侵す。色欲に憑かれたヤスリが内を擦り、血を飲んだ。力で敵わず、痛みにも耐え

られず、ただ情けない呻きを漏らすばかりだった。そしてなお、得意げに手で引つ掻き回す。

よし、じゃあいくぞ。その声で、無骨でグロテスクな本命を、突き刺した。

「う、そ、やだ!!」

軽い体で愛する飯綱丸と突つきあうのとはわけが違う。大の大人の体重を乗せたそれが、機械的に、傷だらけの壁を削り

ながら、内臓を何度も押しつぶす。

「待って痛い!、やめて、それ、」

極端な上向きに突き上げられた典が未知のレベルの鈍痛にすっかり支配され、腰をよじるが、痛みを助長するだけだった。しかしだ。快感とある線を越えたとき、痛みすら全てそれに変換されることを、典はよく知っていた。ましてやこの時期だ。

そしてそれが、甚だ耐え難い激痛の成れの果てに感じ入る自分自身が、もはや恐ろしく、信じられなかった。

胡座をかいて典の頭を乗せていたもう一人の男が瓢箪を彼女の口に突っ込んだ。鼻も塞がれ溺れるように飲まされたのは、米焼酎だった。胃も肺も区別なく侵入し意識を丁寧に溶かしていく。

「お前さつきからいきっぱなしだろ、とんだ淫売だな」

打ち震える身体も、だらしなく漏れる息も、灼き切れる脳も、全て心にもなく、ただひとつ涙だけが、自分の意思を体現していた。

「おい寝るな、おいー!」

右耳がかつ開かれたところに規格外のノイズが飛び込んだところで、眼前の景色は一瞬ホワイトアウトし、その耳は機能を失った。

眠気覚ましと称す。刺激に頭を抱えた典の体を起こし、上下入れ替えると、男の上に乗った彼女の上に、さらにもう一人が被さる。

「えっそんな、やつ、あああ!痛ったあ!!」

ツバを塗った典の尻に振じ込み、前から後ろから、すり潰す。明滅する意識から想像もつかない叫びを上げる彼女にも構わず、食る。

快感でカバードキせる範疇はとつくに超えていた。背で男が体を動かすたび、ハウリングのように、反射で叫ぶ。小さな枡に注がれる濁流が全てを洗い流す。

「うるせえな、こいつ」

上から腕で首を締め付ける。いよいよ消えつつある意識にかき消される痛みを前に、まあいいかと、ぼんやり夢を見た。「しっかし顔が良い……捨てんのがもつたいいいな」

酒の浴び過ぎで血の気が引き白身の露呈した顔を、もんだり引つ張ったり、いじりまわす。

「これ死ぬぞ、人間じゃ。狐つてどうなんだろうな、気をつけねえと」

二人同時に引き抜き床に典を下ろす。血だか精液だか屎尿だか、赤黒い液体がこぼれ落ちた。

「……尻、壊しちゃったか？」

括約筋は伸び切り、そこから見える限り全体の粘膜が真っ赤にむけている。前はというと、同じような状態で、鮮血が絶え間なく流れ続けている。

「よしこれで起こそう」

打刀の鞘をまず三寸、踏み荒らされた聖域に挿し……刺し込み、さらに二寸。

典の身体が跳ね無事覚醒した。そこから見てわかるほど深く突き刺さる様子に刹那驚嘆し、直後絶望する。学習性無力感を直感する。そんなアブノーマルが全身に重くのしかかっていた。

黒色のさやが鮮やかな赤を滾らせ突き破らん勢いで芯を打つ。始めこそ健気に叫んではいたが、ついに脱力し呼吸すら怪しくなった。

「だめだ、流石に死んじまう。早めに捨てよう」

エンドルフィンの海を漂う典を担ぎ民家から脇道へ出た。

「飯綱丸様！典を……見失いました」

あのボンクラどもが最大の焦燥を屋敷まで運んできたのは、時にして九つ。『見失つ』てから半刻も経つて後のことだった。そして自ら探そうともせず、報告から家へ直帰した、どのみちボンクラには任せられないが。

どの店で飲んだ？聞きそびれてしまったが、だいたい奴らの集まる店に限られる。その帰路で野ションして戻ったら消えていたという。

とても一人で動ける状態ではなかったことも聞いた。最悪を覚悟せねばなるまい。

そしてその覚悟は、あろうことか実る。

最速のブン屋を薙ぎ倒す勢いで搜索を試みたところ、一人の白狼天狗が慌てて呼び止めた。

「つつ、典さんのことです。えと……診療所に運びました。狭い道でうずくまつて、傷だらけで、その、……暴漢に襲われたように」

「ありがとうございます。落ち着いて。典から聞くよ。今度麦飯を贈ろう」

この繁華街で診療所といえばあそこしかない。ほぼ酔っ払いの対応専門となつているところ。

屋敷の自室では浴びない、清々しい朝日が目を刺した。見知らぬ天井から垂れる青いカーテンが部屋を囲んでいるが見える。その外側ではすでに忙しそうに何人もが物音や声を立てている。

消されたラジオ、巨大な輸液バッグと小瓶が吊られた点滴台、自分の右手を諸手で握つたままベッドの端に突つ伏す龍……起きて、泣き腫らしたらしい目を開けこちらを見つめる。

「んへへ。やられちゃいました」

小さな処置室の簡易ベッドで血まみれの毛布にくるまれながら第一声、私ははそう言った。

やられた。しかし昨日のことはよく覚えていない部分も多かつたし、それでいいと思う。

「……強がるんじゃない」

外で壁を打つ音が三回。続いてカーテンが滑り、医師と若くガタイのいい看護師が入ってきた。

「やおおはようございます。回診、とはいえ一組ですが」

こいつムキムキでしょ、みんな酔った勢いで暴れるもんだから、強い人集めてるんですわ。ははは。和ませるつもりか二人勝手に笑う。

「昨日飯綱さんにはお話ししたんですが、改めて。えー、後頭の裂傷は、診た時点で既に痂……かさぶたで綺麗に塞がっております。それから、厄介な……腹の傷ですね。粘膜という粘膜がとにかく広く擦り傷になってまして。人間なら諦めるところなんですがね、できることといえばこれ。抗生剤入れるくらいしかないんですわ」

小瓶を爪でつついてみせる。
 どうでしょ、昨日と比べて、気分は。

「……右耳が、聞こえないです。」

耳鏡がこの場にないらしい。手で耳のわさわさに触れる。

「んやつ、ちよつ、やめて」

無神経な触り方で気力を吸い取られた自分をよそに説明を続けるに、一、二週間で鼓膜も塞がるだろうと。

「敗血症で亡くなった妖怪なんて聞きませんから、今日出てても問題ないでしょう。これが、うちに入院患者がいない直接の理由なんですがね。それと飯綱さん。向こうで少しお話を」

飯綱さん、あの子けろつとしてますがね、ありや健忘です。いつまたその記憶を掘り返すことになるのか……ほんの些細なことであってもです。他人の無神経な言動、その時と似た空間、……箸を落とす音でさえあるかもしれません。何が記憶を逆撫でするか……

それと、どうかいつも通り接してあげるように――

最速を超えて替えの服を屋敷から取り、診療所の寝間着から着替えさせてわざわざ徒歩で帰る。

「麦飯握ってきたんだが」

「……いいです」

今にも飛ばされそうなほどにふよふよ歩く典の背中に腕をまわして進む。こんな状態でも、常時見ている必要はないとしてここから出された。

龍が歩調を合わせているつもりだったが典が龍に合わせているらしかった。自分の意思で道を曲がらない。

式じやないが、式が抜けたような。

道行く人々がやたらこちらを見て気の毒そうな視線を置いていく。噂の伝達だけはいつも早い。まったく憎たらしい奴らだ。普段の指示もこれくらいに早く伝えてほしい。

「腹、痛むか」

少し考えて首を横に振る。

抜け殻と話しているようだった。そこに典はいない。いかなる陰惨な辱めを受けたかなど龍は聞けるはずもなかったが、虚ろな管からのこだまを相手しているような異常から程度はわかる。

……いずれ知ることになる。人間社会でいうところの旧町奉行が首を突っ込んでくるだろう。暴漢への憤りよりも現状への悲しみが強く、本音ではしばらくの間誰にも干渉されず、ただ二人でいさせてほしかった。

「何か飲もうか」

唐突な大天狗との目見えでがちがちに緊張している茶屋の娘に煎茶、水、日本の串団子を注文し昇りかけた陽の注ぐ長椅子に二人腰かけた。

典は団子を断り冷ました茶をちびちび啜っている。結局龍が二本とも片付けるが、いくら噛めどまったくの無味で、乾ききった口に粘土を押し込むような苦行となつた。

何を食つてもまずい。世界にグレースケールのとぼりが下りた。

屋敷に着けば、きつと世界は輪郭すら失うだろう。粘土を喰らうことも、わざわざ店の娘を怯えさせることもなくなつてしまう。それが何よりも怖かつた。

もつと言えば、虚ろになつたこの管と正面から向き合ねばならなくなる。

しかし時は進むし、足も進むのだ。

屋敷の門をくぐり歩く。二人ともにとつて最も気の緩むところであるはずなのに、土間へ近づくとつれその足はみるみる重くなる、またそれに連動して、龍の心の臓を締めつける悪魔の手に力が入る。

足は、進む。

六枚もの引き戸の端を引き、ついに足を屋敷へ乗せた。

下駄も脱がぬまま、堪えられず強引に典を抱き寄せる。これが最悪手であろうことは龍もわかっていたが、典はそれでも

黙って身を預けていた。

そして典の乱れた髪に息をかけたまま、何もできず過ぎる時を遮り、

「……何もしてくださらないんですか」

彼女の頬が濡れていた。いつものようにはにかみながら。

「この顔を、龍はよく知っている。」

「頑張ってからかわなくていい」

典は龍が何もできないことを勘づいていた。そしてそれが最良手であろうことも。

「最愛の狐の糜爛に鴉は、あるいは聾員の鴉の惰性
に狐はどう向き合うか」

小説ID : 257636

雷之電

Generated by ハーメルン